〔　参　考　〕

１．読谷村の手作り工芸について

読谷村では、むらづくり総合計画基本構想の基本施策の中で「手作り工芸の振興」として「1）読谷山花織の振興」「2）ヤチムンの振興」を掲げております。

読谷山花織とヤチムンは、本村を代表する伝統工芸品であり、特色ある地域文化でもあります。

読谷村花織は、１５世紀頃にビルマ・インド方面から伝わったとされる歴史の古い本村独自の織物で、一時途絶えていたものを昭和３９年から関係者の熱意により振興したものです。

読谷村伝統工芸センターは、昭和56年に建設され、後継者の育成や共同染色、製品検査などをとおして生産性の向上や普及宣伝、さらに協同組合の事務局として重要な機能を担っています。
また、組合では組合員の協力のもと新たな製品開発、販路の拡大など伝統工芸品の振興に務めています。

伝統工芸センター（花織会館）

與那嶺　貞さん
国指定
無形文化財技能保持者

また本村は、沖縄の古窯「喜名焼」の発祥地でもあります。復帰の年の昭和４７年に壺屋から金城次郎氏（昭和６０年人間国宝）を招き、登り窯による作陶が始められました。

人間国宝・名誉村民
金城　次郎氏
生年月日：大正元年十二月三日

一九七二年に、那覇の壺屋から喜名焼発祥の地である読谷村に移り住み、読谷壺屋焼・金城次郎窯を構えました。読谷村のやちむんづくりの基礎を築くと共に、文化づくりの一翼を担っています。
一九八五年四月、国の重要無形文化財「琉球陶器」の保持者である人間国宝として認定を受け、名実ともに日本を代表する陶芸界の巨匠と認められました。卓越した技量と素朴で大らかな人柄は、その作品とともに誰からも親しまれ、愛されています。一九八九年八月「名誉村民」となりました。

その後、４窯元が大型の共同登り窯を中心にヤチムンの里を建設し、現在では県内外から多くの陶工が集まるようになりました。

そして、共同販売センターの設置により、読谷山花織とヤチムンの展示即売場が整備され、販売促進のみならず郷土色を活かしたレストランとあわせて、地域文化の紹介の場ともなっております。

可憐な花柄の読谷山花織や生命の躍動感あふれるヤチムンは本村の財産であり、その資質を充分に発揮し、本村のみならず沖縄の地域文化として結晶させていくむらづくりを目指しているところであります。

読谷村陶芸研究所

これらの地域文化の振興を図る上でいくつかの課題がありますが、その課題の一つとして、原材料の安定的供給体制の確保が上げられます。

読谷山花織では、染料の原料となるテカチ、グール、ヤマモモ、フクギ、シイなどがあります。また、ヤチムン陶土や薪の安定確保が必要で、特に年々少なくなる松材の薪の確保は深刻な課題となっております。

読谷山焼の窯開きは1980年の7月。
県内でも最大の登り窯を擁する窯場として稼動し続けています。
1990年代からは、若い世代の陶工たちが独立して「北窯」を主宰。やちむんの里は、新たな時代に向けて胎動しています。